

国語問題紙

2025年2月7日

10:20～11:20(60分)

答案作成上の注意

1. 試験開始の合図があるまで、この問題紙の中を見てはいけません。
2. 国語の問題紙は **国語 1** から **国語 13** までの13頁です。
3. 解答用紙は、記述解答用の **国語解答 1** とマーク解答用の**解答シート**の2種類です。
4. 監督者の指示にしたがって、**解答シート**には受験番号、氏名を記入するとともに、受験番号をマークし、さらに受験科目欄に国語と記入した上で**科目コードの国語**に対応するコード**(A)**にマークすること(裏表紙の例示を参照のこと)。
5. 試験開始後、監督者の指示にしたがって、記述解答用紙 **国語解答 1** には受験番号と氏名のシールを貼付すること。
6. 問題紙・解答用紙に印刷の不鮮明なところなどがあった場合には、監督者に申し出ること。
7. 【記述解答】の表示がされている問いについては、**国語解答 1** の指定の箇所に解答すること。
8. 記述解答では、句読点や(), 記号も一字として数える。
9. 問題文中または文末等に、☐ の表示がされている問いについては、**解答シート**に解答すること。
☐ 中の数字が**解答シート**の解答列番号に対応しているので、例えば **①** と表示のある問いに対して**10**と解答する場合には、解答列1の**⑩**にマークすること。
10. **解答シート** 解答上の注意事項
 - (1) 解答は、必ず鉛筆(F, HB)を使用すること。
 - (2) シートは汚したり、折り曲げたりしないこと。
 - (3) 一つの解答列に二つ以上マークしないこと。
 - (4) マークが正確にされていない場合には採点されないことがあります。
 - (5) 訂正するときは、プラスチック製の消しゴムを用いて消し残りのないように消し、消し屑を残さないこと。
11. 試験時間終了まで退室してはいけません。

問題一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(配点 50)

- ① 数字が重要な価値をもつ社会は、数字によって人間を序列化する。単に数値で測られるだけではない。たとえば会社では利益をどれだけ挙げたのかが基準になり、営業成績の良い会社員が評価される。数値が支配する社会では、人間を役に立つか立たないかで切り分けられる。

(中略)

- ② アメリカの喜劇役者チャールズ・チャップリン(一八八九―一九七七)が監督・主演した『モダン・タイムス』(一九三六)というコメディ映画がある。チャップリンが演ずる工場労働者の主人公は、機械と資本家に縛り付けられながら同時にコミカルに工場のラインを乱し、上司をばぐらかすこと^{あつが}で抗う。映画の前半で、チャップリンは人間が工場や機械に管理される様子を描いた。チャップリンはベルトコンベアに乗って歯車に巻き込まれながら文字通りに歯車と一体化する一方、社長は社長室でジグソーパズルで暇をつぶしながら、テレビ画面を通して労働者の働きぶりを一望に監視するのである。

- ③ 一九二九年の世界大恐慌のあとに作られた『モダン・タイムス』では、失業者のデモや労働者のストライキといった、困難を抱えた労働者の反抗が映し出されている。ヒロインの若い女性は養護施設に收容されそうになったところを逃げた人物であり、困窮した子どもたちが置かれていた状況もうかがえる。デパートの警備員や酒場でのウェイトレスや踊り子といった職業を転々としながら、どたばたとトラブルを起こしつつ、衣食住と自由のために格闘している。工場のなかで機械の歯車になることに抵抗しているのである。

- ④ 『モダン・タイムス』は経済的な原理が優先するなかで一人ひとりの顔が見えなくなる社会を描いてもいる。映画冒頭、工場労働者が集団で仕事に向かう場面では、羊の群れのカットのあと顔が見えない労働者たちの群れが映し出される。労働者たちはほとんど同じ服装で同じ動作をするために一人ひとりの区別がつかない。

- ⑤ イギリスの哲学者ジェレミー・ベンサム(一七四八―一八三二)は「最大多数の最大幸福」という功利主義^(一)といわれる議論を展開した。この主張は、ジョン・スチュアート・ミル(一八〇六―一八七三)からヘンリー・シジウィック(一八三八―一九〇〇)に受け継がれた。幸福が社会的な善の原理であると主張する前提として、幸福が数量化できるということ、最大多

数の人（Ⅱ）X の社会）にとって役に立つということが重要になる。功利主義によって「多数」と「最大」という数の基準が価値に導入されたのである。ミルはいう。

幸福が善であること、それぞれの人の幸福はそれぞれの人にとって善であること、それゆえ、社会全般の幸福がすべての人々からなる全体にとって善である（以下略）。

幸福が善でありうることは私も否定しない。しかし「社会全体の幸福がすべての人々からなる全体にとって善」とミルがいうとき、排除されたり抑圧されたりする少数の人への配慮が欠けるのではないか、という点が気になるのだ。「社会全体」という顔を持たないものが主語になっているため、全体を優先したときにはいつのまにか消されてしまう人が生まれるのではないかという点にひっかかるのである。

社会福祉学者の藤井渉によると、日本の障害者政策は、第二次世界大戦中の傷痕軍人の支援制度の影響を受けているという。国家に奉仕して戦争で負傷した「役立った人」と、戦争の「役に立たなかった人」という切り分けが初めからあったというのだ。

戦争の役に立つかどうかという切り分けは、戦後になって「経済的に役に立つかどうか」に変化している。日本の主戦場は軍事から経済に移ったのだ。^(一)たとえば現在の障害者の支援制度は就労がゴールになっている。障害者がサポートを受ける場合「就労継続支援A型、B型」というように、名称自体に「就労して納税者になる」ことが目的であると明記されているのだ。このように、障害者も労働へと駆り出される。

経済的に役に立つかどうか、それは生産性という言葉に置き換えることができる。個人の生産「性」は、他の人との比較において決まる。^(二)自分のために作るのなら「生産性」は問われない。そして、その比較を誰がするのかというと、人ではなく組織や国家である。^(三)つまり人間の生産性が問われるときの主体は、あくまで組織・国家なのだ。^(四)お互いの顔が見えない巨大な社会では、組織の視点でものごとが決まる。たとえば、テストの点数や年収で他人と自分を比べているときも、自分が誰かと競っているように見えて、実は学校や国家といった顔のない組織によって品定めされているのだ。

^(五)こうした組織や国家のパーツになるという問題は、生産性を問われる場面だけでなく日常にも潜む。たとえば、多くの人は体重

や血糖値の値を気にし、ウェアラブル端末でさまざまな身体データをチェックしている。健康診断の結果に一喜一憂する。これらはすべて自分の身体を数値化する営みだ。

「自分で自分の健康指標をチェックしているのだし、健康に気を使っている限りでは、国家は関係ないのではないか」と思う人が多いだろう。ただ個人が健康を管理するような仕組みをつくることで、国家はそのような意識を利用して医療費を抑制している。

倫理学者の玉手慎太郎は、「高血圧や糖尿病の危険が高まるメタボリックシンドローム（内臓脂肪症候群）の患者や予備軍の人口を二〇二〇年度までに現在の一四〇〇万人程度から二五％減らす」（日本経済新聞二〇一五年一月三〇日朝刊）という政府の方針を報じた新聞を引用しながら次のように述べている。

この記事が伝えている政府の方針は、一見すると人々の健康への配慮からのもと思われるが、実はそうではない。というのもこれは、政府の経済財政諮問会議がまとめた、財政健全化に向けての改革行程表の原案についての記事だからである。ここから読み取れるのは、国全体の財政の健全化のために人々に健康になってもらわなければならない、という政府の態度であり、そしてここにあるのはまさしく、社会全体の利益のための健康増進という考え方である。

自分では健康のために節制しているつもりでも、実はこれは国家の意志を内面化したものだというのが、さらには、自ら健康でいることは、労働者として国家の役に立つという点でも、支配する側にとっても都合がよいのである。つまり他の人との数値を競い合うのも自分の数値を気にするのも、国家の役に立つという基準があるのだ。

（村上靖彦『客観性の落とし穴』より）

問一

波線部(ア)「はぐらかす」の意味として最も適切なものを、次の1～5の中から一つ選びなさい。

①

1 あごで使う

2 白い目で見る

3 手玉に取る

4 煙に巻く

5 水に流す

問二

空欄

X

には「多数派」を表すカタカナの表現が入る。適切な表現を五字から七字で解答欄に記入しなさい。【記述解答】

問三

傍線部(一)について、次の文は筆者の功利主義に対する評価を説明したものである。空欄まる表現として最も適切なものを、それぞれ次の1～4の中から一つずつ選びなさい。A

②

B

③

A

が、

B

点に心配がある。

A

1 幸福は善であると考えても差し支えない

2 幸福と善の関係は間違っていると言える

3 幸福と善の関係は複雑なものだ

4 幸福は善からしか生まれない

B

1 多数派と少数派の意見調整で幸福の追求が進まない恐れがある

2 少数派の善を考慮することが多数派の善に繋がるといふ視点が抜けている

3 社会全体を基準にすると、少数派を抑圧したり同化してしまう

4 少数派は幸福や善とは違う価値観で生きていることが理解されていない

問四

傍線部(二)を説明したものととして最も適切なものを、次の1～5の中から一つ選びなさい。

④

- 1 障害者も社会全体が目指すものと同じく顔が見えない存在だと見なされているということ。
- 2 障害者も働いて納税することで、国家にとって役に立つことを期待されているということ。
- 3 障害者も年収という数値化されたもので他者と比較される社会になったということ。
- 4 障害者にとつての幸福を数値化することで、社会全体の善を求められるようになっていくということ。
- 5 障害者の中でも役に立つ人と役に立たない人の切り分けが始まりつつあるということ。

問五

傍線部(三)について具体例として適切でないものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

⑤

- 1 料理教室で教えるためのレシピ開発
- 2 自己の人生観を振り返るために書く短編小説
- 3 心の平穏を得るための庭作り
- 4 自宅に飾るための陶芸作品

問六

傍線部(四)に関連する事例について述べた次の文の空欄

C

に入る適切な表現を、十三字以上十五字以内で解答欄に

記入しなさい。【記述解答】

戦争で負傷した傷痍軍人が支援を受けることができたのは、

C

からである。

問七

傍線部(五)について、このことが持つ問題を本文の趣旨を踏まえて説明したものととして最も適切なものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

⑥

- 1 数値の競い合いによってかえって健康を損なう人が生まれ得るという問題
- 2 国民の健康にまで踏み込まなければならないほど国の財政を健全にするのが大変であるという問題
- 3 健康管理という個人的な問題が国家によって管理され、社会の規範となり得るという問題
- 4 財政の健全化のために、国がメタボリックシンドロームの患者数を操作できるという問題

問八 二重傍線部(a)を次のように言い換えたとき、空欄 に入る最も適切な表現を本文中の玉手慎太郎氏による議論の

中から抜き出し、五字以上七字以内で解答欄に記入しなさい。【記述解答】

人を になるかどうかで評価することができる。

問九 二重傍線部(b)について次の問いに答えよ。

(i) 「お互いの顔が見えない巨大な社会」が映画『モダン・タイムス』の中で表現されている段落はどこか。文中に付した番号のうち最も適切なものを、次の1～5の中から一つ選びなさい。

1 2 3 4 5

(ii) 映画『モダン・タイムス』で「組織の視点」を表している登場人物はどのような人物か。十三字以上十五字以内で解答欄に記入しなさい。【記述解答】

問題二

次の文章は、生物と機械を統一的な観点から理解しようと構想された分野横断的な科学「サイバネティクス」と、生物学、人類学、社会学、精神医学などの多様な分野で活躍したグレゴリー・ベイトソン（一九〇四—一九八〇年）の思想について説明したものである。読んで、後の問いに答えなさい。（配点 50）

制御に対するベイトソンの問題意識は、サイバネティクスという学問それ自体にも向いている。

コンピュータの操作を例に考えてみよう。私はいま、ワープロソフトを使ってこれを書いている。私がコンピュータに対してキーボードで入力を与えると、内部で情報処理が行われ、モニター上に文字が出力される。そのようにして「私がコンピュータを制御している」と考えるのが普通の見方だろう。

それに対してベイトソンは、より大きな全体に着目する。この場合、私とコンピュータを一つのユニットとして考えるのである。すると制御という様相は消え、より大きな循環が見えてくる。すなわち、私の思考の変化が指の動きの変化を生むと、キーボードの状態が変化する。するとコンピュータ内に電気信号が発生し、諸々の処理へと連鎖して、モニター上の文字となって映し出される。それは私の網膜の状態を変化させ、私の思考の変化を生み、再び指の動きへと続いていく。ここにあるのは、コンピュータというシステムを制御する私ではなく、私というシステムを制御するコンピュータでもなく、両者が一つになった循環である。

システムは、その外部環境から切断して見たときに初めて制御されるシステムとして見えるのであって、システムとその環境という、より大きな関係性の全体を眺めれば、それ自体が大きな循環するシステムとして見えてくる。だからベイトソンは、サイバネティクスをシステムの制御ではなく、循環するシステムの理解をめざす学問として位置づけ直す。これまでのサイバネティクスは、制御という概念を重視することで、システム全体ではなくその一部を切断して見てしまっていたのだと言うのである。

これは「自己(self)」の問題ともつながってくる。我々は普段、自己の境界は生物としての身体的境界にあると考えているから、人間を一つのシステムとして見ることに抵抗はない。しかしベイトソンは、人間を一つのシステムとして、あるいはコンピュータを一つのシステムとして見るのではなく、両者が一体となって作動しているその全体を一つのシステムとして見るように促す。

ここで勘違いしてはならないのは、ベイトソンはコンピュータと一体となった一種のサイボーグを自己として規定するわけではないということである。もしそうなら^ア通俗的なサイバネティクスのイメージとも重なってくるが、それは彼の真意ではない。

ベイトソンは、杖を使って歩く盲人の例でそれを語っている。その人の自己は、杖の先から始まるのか、それとも杖の柄と皮膚の間か、あるいはどこかその中間か、と問いただし、どのように考えようとしても、自己というものの境界線を引こうとする限り、「盲人の動きを決定するシステム全体のサーキットを切断してしまう」と指摘する。

つまり彼は、もはやどこかに境界を持つ自己なるものを見ていない。道の凹凸や障害物まで含めて、盲人の歩行に関係するサーキット（回路）の全体がシステムなのであって、それを理解することこそが重要だと考えている。そこに自己や制御といった概念を持ち込むと、理解すべきシステムの全体を a に切断することになってしまう、と。

制御や自己という概念に潜むこうした切断性は、人間が自分自身を制御しようとする場合でさえ当てはまるとベイトソンは考えている。面白いのは、それをアルコール依存症の分析に応用してみせる点である。アルコール依存症の患者は、アルコールの誘惑に打ち勝つべく、自己を制御しようと努力するが、大抵はうまくいかない。なぜなら、彼らは b からなる、より大きなシステムの一部としてすでに組み込まれているからである。そのようなシステムの中で自己を鼓舞して制御しようと努力しても勝ち目はない。そうした自己制御への期待は、西洋に特徴的な自己なる観念と強く結びついている、とベイトソンは批判的に見ている。

余談だが、では依存症からの脱却法としてどのような方策があるのかというと、まずは強い自己であろうとすることを諦めてシステムに降伏すること、それから彼が注目しているのは、自分をより大きなシステムの一部として考える、ある種の宗教的な方法である。

制御という概念によってなされる全体からの切断は、その対象を入出力マシンとして捉えることでもある。全体から切断すること、どのような入力を与えると、どのような出力が返ってくるかという見方が生まれる。制御という概念は、そうして人間と機械を並置し、人間対機械、人間対環境、人間対人間といった対立を生み出してしまふ。しかし少し視野を広げれば、そこにあるのは循環である。だからベイトソンは制御ではなく、循環による全体の調和を目指すのである。

ベイトソンのシステムや自己の捉え方は、そのまま「精神 (mind)」と呼ばれるものの理解にもつながっている。彼にとって精

神とは、一人の人間に局在するものではないし、脳神経系と等値されるものでもない。先の議論によれば、一人の人間やその脳神経系は、恣意的に囲い込まれたシステムであり、本当に理解すべき全体から切断されたものに過ぎない。

バイトソンいわく、精神とは「相互作用する部分（構成要素）の集まり」である。何とも抽象的な定義だが、要するにこれまで述べてきたような大きなシステム全体が、すなわち精神である。「調和的にはたらく一つの大きなアンサンブル」——試行錯誤の原理で動き、創造性を持つその全体——にこそ、精神は宿る」と考えられている。¹

ここで思い出してほしいのは、彼にとってシステムとは、そのとき関係している全体であって、その多くが特定の状況に即した暫定的なものだということである。コンピュータと人間が織りなすシステムは、それが一体となつて作動している限りそのシステムである。²

そうしたシステムは、何層にも折り重なつてさまざまなスケールで存在している。一個の体細胞をめぐるシステムから、多数の人間が織りなす複雑なコミュニケーション・システム、果ては生態系全体の進化というスケールまで、さまざまなシステムが同時に存在し、そのそれぞれが精神的特性をもっていると考えられている。

精神の生態学という言葉は、このような精神の捉え方に由来している。何層にも折り重なった多様な精神が調和的に働く世界、それがバイトソンの見ている世界である。³

肝心な点は、そうした「精神として見た世界」は、物理的世界とは異なる「差異(difference)」の原理によつて成り立っているという点である。

バイトソンに倣^{なら}つて、きこりが斧で木を切るシーンを思い浮かべてみよう。きこりは直前の一振りによつて木に作られた切り目を目掛けて、斧を振つていく。この切り目は、同じ木の表面上で、他とは異なる部分として、つまり差異として存在している。この差異は、きこりの網膜に差異を作り出し、彼の脳内の差異へと変換される。通常の言葉で言えば、きこりによつて見られ、認識される。するとそれが彼の筋内に差異を作り出し、斧の動きの差異となる。つまり、そこを目掛けて実際に斧が振られ、その結果として、木に再び差異が作られる。⁴

きこりによる木の伐採は、このように差異が別の差異に変換されながら巡っていくシステムとして理解される。きこりが認識する、きこりが木を切る、という捉え方は適切ではない。精神とは、きこりが持っているものではなく、循環するシステムの全体に

宿っているものであり、そこを巡っているのが差異であるという。

ベイトソンは、こうした理解のもとに「情報」を定義する。すなわち、情報とは「差異を生む差異(A difference which makes a difference)」である。 **5**

(西田洋平『人間非機械論』から)

問一 二重傍線部(ア)「通俗的」、(イ)「局在」の意味として最も適切なものを、それぞれ次の1～4の中から一つずつ選びなさい。

(ア)「通俗的」

- 1 一般的であるさま
- 2 下品で卑しいさま
- 3 誤謬を多く含むさま
- 4 一時的なものに過ぎないさま

(イ)「局在」

- 1 ひとつの存在に依存していること
- 2 かたよったところにあること
- 3 現象として観察可能であること
- 4 分断されていること

(ア)

8

(イ)

9

問二

傍線部(一)「私がコンピュータを制御している」と考えるのが普通の見方だろう」では、「私」は「コンピュータ」とは別の一つのシステムであることを前提とした「普通の見方」が説明されている。なぜこのように人間を一つのシステムだと考えているのか。その理由として最も適切な箇所を本文中から二十五字以上三十字以内で抜き出し、その最初と最後の五字をそれぞれ解答欄に記入しなさい。【記述解答】

問三

傍線部(二)「私の思考の変化が指の動きの変化を生むと、キーボードの状態が変化する」とは具体的にどのようなことを指しているか。その説明として最も適切なものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。⑩

- 1 私の考えが変わって、その考えを指を動かして入力しようとすると、キーボードが指に押されて動くということ。
- 2 私が頭の中で書く内容を考えると、無意識のうちに自然と指が動き、キーボードを動かすということ。
- 3 私の考えは時間とともに変化し、いったん入力した文字を消して、新しい内容をキーボードで入力するということ。
- 4 私の思考は変化するばかりでなかなかまとまらないが、ひとまず指を動かして何かを入力すると、さらに思考が進化するということ。

問四

傍線部(三)「循環」とあるが、なぜ筆者は「循環」として捉えているのか。その理由として最も適切なものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。⑪

- 1 人間だけを知性を持つ特権的な存在として捉えるのではなく、さらに大きな環境という視点からシステムを捉えるため。
- 2 コンピュータを、システムの中で一方的に人間から制御されるだけの存在としてではなく、人間を制御する存在として捉えるため。
- 3 コンピュータと人間を外部環境から切断したものとして見るならば、両者は一つのユニットであると理解できると主張するため。
- 4 コンピュータと人間を制御されるものと制御するものという関係として捉えるのではなく、ともに動く一つのシステムとして捉えるため。

問五 空欄 に入る語として最も適切なものを本文中から抜き出し、三字で解答欄に記入しなさい。【記述解答】

問六 空欄 に入る表現として最も適切なものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。⑫

- 1 アルコールや周囲の人間たち、その他の環境など
- 2 酒やジャンクフードを選んでしまう自らの弱さ
- 3 宴席の誘いへの拒否、アルコールを隠す対策など
- 4 西洋と東洋の違いが生み出すアルコール耐性の違い

問七 傍線部(四)「二つの大きなアンサンブル」とはどのようなことを形容した表現か。次の空欄 に当てはまる形で、十字以上十五字以内で解答欄に記入しなさい。【記述解答】

相互作用する部分が集まり、それらが試行錯誤の原理で動いて創造性を持つのが精神であり、 という点が音楽のアンサンブル(合奏)と共通する性質を持つということ。

問八 本文には次の一文が抜けている。それを入れる本文中の箇所として最も適切なものを、次の1～5の中から一つ選びなさい。⑬

杖を頼りに歩く盲人のシステムは、歩くのをやめたとたんに消え去る運命にある。

- 1
- 2
- 3
- 4
- 5

問九

次のア～ウのうち、本文の内容と合致するものは「1」を、合致しないものは「2」をそれぞれマークしなさい。

ア

⑭

イ

⑮

ウ

⑯

ア 制御という概念で生まれるものは、人間と機械を対立させる見方である。

イ スケールが異なるさまざまなシステムは、場面に応じてシステムの切り替えを行ないながら動作している。

ウ ベイトソンは、きこりは、自らの精神の働きによって木を認識し、伐採を行っていると理解している。